

一八八七年四月九日(土)

翌日、一八八七年四月九日、土曜日。タクールにお供えしたあとで、僧院マトの兄弟たちはお下がりブラサードを
いただいて少し休息している。ナレンドラと校長は、僧院マトの西側にある庭の一本の樹の下に坐つて話
をしている。他には誰もいない。ナレンドラはタクールにお会いた後のさまざまの出来ごとを語つ
た。ナレンドラは二十四才、校長は三十二才。

校長「最初にお会いた日のごとは、よく憶えているでしょう？」

ナレンドラ「南神村フネキシヨルのカーリー寺でした。あのかたの部屋です。その日、ぼくは二つ歌をうたつ
たのです。この歌——

歌 心よ、いざ自らの住家すみかに行かむ

この国は外とつ国くに、異国の装いして

何故なげあてどなく さまよい歩くか

周囲まわりの五元素と生きものたちは

すべてこれ汝のものに非ず

他者よそのものに眼眩まどくらみて

何故、自ら忘れ果てしか

心よ、真理の道を登り行け

愛の灯を常にかかげて

その旅の費えとなる財宝として

たゆまず積みよ陰かなる徳

道ゆく人を待ち伏せて襲うは

貪欲、愚痴という名の強盜

その災難を防ぐためには

平静、抑制という名の護衛を連れよ

旅人の休息宿は聖者の足下

心やすらかに手足をのばし

もし行先に疑いあれば

宿のあるじに案内を頼め

もし道中に何か恐れあれば

命をこめて主の御名を呼べ

抑制——ヨーガの禁戒(ヤマ) || 非暴力、正直、
不盗、禁欲、不貪

主は道の大王、この上なく強き支配者
死の国の王(ヤマ)もその前にひれ伏す

歌 主よ ああ わが日々は空しく過ぎゆく

希望の道をただ、日も夜も見つめて――

君は三界の主、われは地上のあわれな乞食

わが胸に來りて住み給えとは

恐れ多く口に出せず――

ただ胸の賤が家の戸は

常に開け放してあれば

ねがわくは慈悲もて一度なりとも

入りましてわが渴仰をうるおし給え

校長「歌を聞いて、タクールは何とおっしゃいました？」

ナレンドラ「恍惚となつてしまつて、ラームさんたちに質問なさいましたよ――『この子は誰だい？

ああ、なんてすばらしい歌だろう！』そしてほくに、又来るようにとおっしゃいました」

校長「その次には、どこでお目にかかったのですか？」

ナレンドラ「その次はラージモハンの家でした。その次にはまた南神村^{トフキネンシヨル}で……。その時には前三昧状態でほくのことをすごく讚^ほめはじめて——『ナーラーヤナ、あんたはわたしのために肉を纏^まって来てくれた!』とまで……。」

でもこんな話、誰にもしゃべらないで下さいよ」

校長「で、そのほかにどんなことを?」

ナレンドラ「お前は、わたしのために肉体を纏^まって来たんだ。わたしはマーに言っていたんだよ——『マー、わたしはどうすればいいんだい! 誰と話をすればいいんだい? マー、女と金を捨てた純粋な信者が来ないのなら、どうやってこの世で生きてたらいいいんだい!』それから、こうおっしゃった——『お前は夜中に来て、わたしを起こして、それからわたしにこう言った——ほく、来ましたよ、と』でも、ほくにはまったく憶えのないことなんです。カルカッタの家でぐっすり眠っていたんですから……」

校長「つまり、君は同時にそこに居たのも確かであり、居なかったのも確か——。ちょうど、神が形を現わすのもほんとの、形が無いのも真実、というのと同じことですよ!」

ナレンドラ「でも、このこと、誰にも話さないで下さいよ」

〔ナレンドラに人々を指導するようにとの命令〕

ナレンドラ「コシポールで、あのかたは力をほくにお移しになりました」

校長「コシボールの庭の樹の下で、聖火を燃やして坐っていた時ですか？」

ナレンドラ「ええ、カーリーに、『ぼくの手をつかんでみてくれ』と言いました。カーリーは、『君にさわったら、ぼくの体に電気ショックのようなものを感じた』と言いましたよ。

このことも、誰にも話さないで下さいね。約束して下さい」

校長「君に力をお移しになったのは、特別な目的があつたからですよ。君を通じて、たくさんの仕事ができるでしょう。ある日、紙切れに書いておっしゃいましたよ——『ナレンが皆に教えるだろう』と」

ナレンドラ「でも、ぼくは申し上げました——『ぼくは、そういうことは致しません』と。

するとあのかたは、『お前の骨がするんだ』とおっしゃって——。シャラトのことをぼくに任せていらつしやいました。彼は現在、夢中になつて神を求めています。彼のクンタリニーは目覚めましたよ」

校長「木の葉が貯まらないようにしないと——。タクールがよくおっしゃったのを憶えていますでしよう——。池の中で魚は穴をつくる。そこで休むためだ。だがその穴に木の葉が入つて貯まると、魚はその穴に行かなくなる」と

〔ナレンドラは絶対者に属する〕

ナレンドラ「ぼくのことを、ナラーヤナ、だとよくおっしゃいました」

校長「君のことを、ナラーヤナ、だとおっしゃったのは、私もよく知っています」

ナレンドラ「ご病氣の時、用を足した後の洗いを、ぼくがお手に注ぐのをお許しにならなかつた……。

コシポールでこうおっしゃった——『カギはわたしのところに置いてある。あれは自分のことがわかったら、肉体を捨てるだろう』と」

校長「君が、例^あの境地になったときでしよう？」

ナレンドラ「あの時は自分の体が無くなって、ただ頭だけあるように感じました。そのころ、家で法律の勉強をしていたんです——試験を受けるために。その時突然、いったい自分は何をしているんだろう！　と思ひましてね……」

校長「そのときタクルは、コシポールにいらっしやったわけでしょう？」

ナレンドラ「そうです。気狂いみたいになって家をとび出して！　あのかたは、『お前、どうしてほしいんだ？』とお聞きになった。ほくは、『三昧^{サマデー}に入つたままでいたのです』と答えた。するとあのかたは、『ケチなことを言うな！　三昧を超えて行け！　三昧なんて小さい、小さい』

校長「ははあ……。あのかたはよくおっしゃいましたね——智^{ジュニヤナ}の上が大智^{グヴィジュニヤナ}（覚智）だと。屋根の上つてから階段を上つたり下つたりする……」

ナレンドラ「カーリーが智識、智識^グと言うから、ほくが叱るんです。先に信仰を熟させろ！　それから智識^グだろう！

それから——これはターラク兄^{バードドツキキシヨ}に南神村^{サマデー}でおっしゃったことですが——『法悦や信仰が究極ではない』と」

校長「ほかに、君のことについてどんなことをおっしゃったか、聞かせて下さいよ！」

ナレンドラ「ほくが、『神の姿とか何とか、あなたがごらんになるものはみな、心の迷いですよ、一種の錯覚なんです』と申し上げた時、あのかたはマーのところへとんで行って、マーにこう質問なさった——『マー、ナレンドラがわたしの見るものはマチガイだと言ったよ。今までマーが見せてくれたものは、本当にウソなのかい?』と。ほくの言うことを信用して下さったんですねえ! あとでよくにおっしゃいましたが——『マーは、あれはみんなホントのことだ』と言ったぞ!』って——。よくこう言われたのを憶えています。胸に手を当てながら、『お前の歌を聞いてみると、この中に住んでいなさる御方が蛇みたいにシユーツとうなつて、カマ首をもたげてジーツと聞き入るんだよ!』でも校長先生、あのかたはほくのことをこんなふういろいろおっしゃったけれど、いったい、ほくが何をしとげたというんでしょうね!」

校長「現在いまはシヴァの境地で、金銭かねに手をふれることができない。タクルのお話、おぼえているでしょう?」

ナレンドラ「何ですか? おっしゃってみて下さい」

校長「役者がシヴァの衣装をしていた。訪問した家で、主人が一ルピー出して与えようとした。ところが役者は手にふれようともしない! 帰ってその衣装を脱いで手足を洗ってから、さっきの家に戻り一ルピーを要求した。家族の人たちが、『さっき出したとき、なぜ受けとらなかつたのですか?』と聞くと、役者は、『あの時はシヴァの衣装をしていましたので——出家ですから——金銭にふれることはできません』と答えた」

この話を聞いたナレンドラは長いこと笑っていた。

校長「君は、今は医者 of 役柄をしているんですよ。皆から頼られて、皆の責任を負わされている。君は僧院^{マト}の兄弟たちを一人前にしなければならぬのです」

ナレンドラ「ぼくたちのやっている修行や何かは、みんなタクルのお言葉に従ってやっているのですよ。それなのに、奇妙なことにラームさんは、修行についていろいろと批判なさる。ラームさんは、『あの方に会っているんだ。それなのになぜ今さら修行なんか……』と、こうおっしゃって——」

校長「自分の信じている通りにすればいいんじゃないですか？ みんな——」

ナレンドラ「あのかたが、ぼくたちに修行をしろとおっしゃったのです」

ナレンドラは、タクルの愛情についてまた校長に語った。

ナレンドラ「ぼくのこと、どれ程マーに頼んで下さったことか。（父が亡くなって）食べるにも事欠いた時、家がほんとに困ってしまって——あの時、ぼくのためにマーに金をお頼みになりました」

校長「知っています。いつか君から聞きました」

ナレンドラ「お金は手に入らなかった。あのかたはおっしゃいました。『マーがこう言いなすった。かれは質素な食べ物と質素な衣服を手に入れる。米と豆が食べられる』と——。

ほんとに、どれほど愛してくださったことか——。でも、ちょっとでもぼくの心に不純なものが入り込むと、すぐお分かりになるんですよ！ アンナダといっしょに歩き回っていたころは、あんまり良くない人たちとも時々つきあいました。そんな時あのかたのところへ行くと、ぼくの手で差し上げ

たものは決して召し上がりませんでした。いくらか手をお上げになるのですが、それっきり、お口まで持っていけないのです。ご病気の時でしたが、お口まで持って行って、それがお口の中に入らなかつた。『お前、まだデキていない』とおっしゃつて。

時々、ものすごく懐疑的になつてしまひましてね。バブラームの家にいたとき、すべては、無^ムだ、と感じました。神とか何とかいうものも、まったくナイのだ、と」

校長「タクールがよく言つておられましたか——あのかたも、そういつた心境に時々なつたものだと」
二人は沈黙した。やがて、校長が口をきつた——「君たちは恵まれている！ 一日中あのかたのことを想つていられて！」

ナレンドラが言う——「どうして？ 神に会えないなら肉体を捨てたい、という境地^{ところ}まで行つていゝるんでしようかねえ？」

夜になつていた。ニランジャンが今しがた、プリーから帰つてきたところだ。僧院^{マト}の兄弟たちと校長は大喜びだ。彼はプリー旅行の経過報告をし始めた。ニランジャンの年令は現在二十五、六才——。夕べの献灯^{アヒライ}がすんでから瞑想をする人もいる。ニランジャンが帰つたので、広間に大勢集まつて坐り、楽しい会話が始まつた。夜の九時過ぎ、シヤシーがタクールに食事を供え、そしてお寝かせした。僧院^{マト}の兄弟たちはニランジャンを囲んで夜の食事をとつた。食べ物^マはルティ、野菜少々、それに糖蜜を少し、それからタクールにお供えしたシユジのバヤスをほんの少しずつ——。(訳註、シユジ——荒く挽いた穀物の粉。バヤス——穀物に牛乳と砂糖を入れて粥^かにしたもの)